
転生の調べ ～ 惑いの面輪 ～

晶れゆな

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

転生の調べ ～ 惑いの面輪～

【Nコード】

N1031E

【作者名】

晶れゆな

【あらすじ】

幼なじみの領は十八才を迎える桜が満開の春、突然、人が変わったように荒んだ。それとともに花南の中に繰り返してきた転生の記憶が甦る。甘く狂おしい現代舞台の和風ファンタジー。転生を繰り返し、【はな】を探し求める【りょう】の激愛物語。

苦しい。
なぜだ？
なぜこんなに苦しいんだ……………。

ドスッ。
くっ。
ドンッ。
うっ。

幾度となく、鈍くぶつかるとくぐもった呻き声が繰り返される。
パタパタパタ。

そのなか、コンクリートの廊下を上履きで駆けてくる音が耳に届いた。

「領、またやってるの?! やめさせて!」
「花南、またおまえか。煩い奴だな。あいつらは躰を鍛えてんだよ」
昼休み、校舎の裏では、九党領流に云えば熱戦が繰り広げられている。

「領ちゃん?!」
走ってきたのと怒っているのとで、真っ赤になった高里花南は腰に手を当てて、領が嫌がっている呼び方をした。

領は花南を疎みあがるくらいに睨みつけた。
「てめえら、引き上げるぞ。気が削げた」
花南には見向きもせず、領は仲間を連れて行った。

あとに残ったのは、二年生まで領の学年を取り仕切っていた海野だった。

「ごめんなさい。まえはあんなんじゃ…」
パシッ。

海野は無言で花南が差し出した手を振り払い、校舎内に消えていった。

校舎の隙間を一際強い風が抜けてきて桜の花びらを運んでくる。

「桜は嫌いだ」

花南が高校二年、そして領が高校三年の春を迎えたとたん、領は魅入られたように学校に植えられた桜の木の近くに佇み、突然そう呟いた。

「おまえ、じゃない」

花南を見下ろしてそう云った領の瞳は、それまで見守るように温かかったのに、とても冷たく様変わりしていた。

同時に、花南の中にも目醒めた別の花南。

あたし、じゃない……。貴方はまた……………。

領は手がつけられないくらい言動が荒くなった。

「ねえ、花南。三年に転校生だって。今時めずらしいね」

数日後、友達の絵里がビッグニュースと称して知らせに来た。

桜の花に貴方を希ふ

また惑いの手が……………。

満月が近づくと……………。

「桜花希さんです。ご両親の都合で……………」

その名を聞くなり顔を上げた領の目に入ったその顔は、紛れもなく【彼女】だった。

驚愕した領の視線と、それに気づいた彼女の視線が絡み合う。

はな。

領がそう象^{かたど}った口もとを確認したかのように、花希が頷^{うなず}いて応えた気がした。

花南は絵里と一緒に通りかかった中庭に、偶然二人が共にいる姿を見つけた。

間違えようのない桜花希と領の二人。

最近はいつも冷たくしか感じられなかった領の眼差しが緩^{ゆる}んでいく。

「花南、九党先輩と一緒にいるのはもしかして……いいの？」

「よくないけど………いいの。ちよつと待ってて」

花南は二人に近づいた。

領が気づき、花南が目に入ると、邪魔だといわんばかりに目を細めた。

「領、紹介してくれる？」

その言葉に反応して振り返った彼女を見ると、花南はこれまでになく驚いた。

まさしく、【はな】そのものだった。

これが花南の希^{ねが}いに対する代償なのだ。

「桜花希です。転校してきたばかりで………？」

花希はそう云って、問うように領を見た。

「おれんちの隣に住んでる高里花南」

花南に戻した花希の視線が、領には見えない位置で妖艶に見返した。

約束。

反故^{ほし}にすればもう廻り合うことはない。

その目がそう念を押す。

「ねえ、花南、いいの?!」

絵里が毎日のようにしつこく責め立てる。

花南は恍^{とほ}ける気力がなくくらいに絶望を覚えていた。

あれから領と花希は噂になるほど寄り添っている。

「よくないけど、仕方のないことだから」

あたしがいなければ、あの惨事が起きることはなかった。自分の命を何度差し出しても足りないほどの命が消えた。

『おまえ、じゃない』

領がそう云った日から花南は邪険にされるばかりで、触れることすら適^{かな}わない。

ねえ、あたし、じゃないなら花希なの？

「ね、領。今日、勉強を見てもらっていい?」

領は三年の下駄箱のところまで待っていた花南を見下ろした。

目醒^{めざ}めて以来、いつも明るかった口もとがさびしそうに少し震えている。

おまえは、はなじゃない。

魔となった領の胸が痛む。

なぜだ?

おれは、はなの希^{ねが}いを叶えたいんだ。そのはなはいま、おれの隣にいる。

十八才を迎える春。

おれは突然、思い出した。
すべて、を。

それまで、花南が傍にすることを当然のように思い、それはずっと変わらないのだと思っていた。

「悪いな。今日は彼女と約束がある」

領は花希にちらりと目をやって、少し優しくなった声で花南に告げた。

優しい声は【はな】に出会えたせい？

「そう。わかった」

花南は領たちのために道を空けた。

花南が微笑む姿は領の記憶の中と重なった。
なにかが違う。

隣を歩く花希を見やり、そして後ろを振り返った。

花南がぼんやりとその場に佇んでいる。俯いた花南が手を上げて
口もとを押さえた。

あたしたちはこんなに近くにいるのに。

今度こそ。

そう願って何度も命を手に入れたのに気づいてくれない。

ねえ、器が大事ななの？

あたしからはなにも告げられない。

それが約束。

ねえ、気づいて。

はな、はな……………。

その姿を見て、領の心が無意識のうちに何度も呼びかけた。
花南が振り向く。

そうだ。

魔になったおれははなを求めるあまり、その心を見失っていた。

「ねえ、帰りましょう。今日は約束の満月。告げる日よ」

花希が【はな】の顔をして領を誘う。

違う。

「おまえは、はなじゃない」

領は校舎に引き返した。

花南は不安と虞おそれが緋ない交ぜになった表情で外に出てくる。

やっと探し当てた。

「九党！ てめえはぶつ殺してやる！！」

領と花南は同時に声がしたほうを向いた。

サバイバルナイフを手に、思いつめたように海野が駆け寄ってくる。

また、あたしたちは……………。

でも、何度でもあたしは……………。

考えるまでもなく、花南は領の前に飛び出した。

「はな！ だめだ つ！！」

それを観ていた花希の口もとが笑みに歪んだ。

あれからもう幾年の月日が経ったのだろう。

止むこともなく、幾度の転生を繰り返したのか。

二百という年を憶えてから、もう数えることはやめた。

いつまで経っても廻り合うことはない。

似た姿を見つけ出しても、それははなではなかった。

約束の日に呪縛を解けず、無意味な余生を送り、死を迎えると同時にまた生まれ堕ちることを繰り返してきた。

何度も、何度も

けれど、今度こそははなのだ。

やっと廻り合ったのに

助けられなかった悔恨。

あの苦しみは二度と……………。

時は昔。妖かしが世を惑わす時代。

「とうさま、かあさま。行って参ります」

気丈に振舞う父といまにも泣きそうな母に、最後となるかもしれない笑みを向けて、はなは迎えの牛車きつしゃに乗り、でこぼこの道を揺られて旅立った。

静かだった牛車の外が俄にわかに騒がしくなってきた頃、街の滑らかな道がはなを心地よくさせていた。

それと相反して、はなの中には消しきれない不安が集う。覚悟はしてきたはずなのに。

その気持ちを整理しきれないうちに牛車が止まった。

とたんに簾すだれが開けられる。

びっくりして見開いたはなの瞳と、上等な着物を身に着けた青年の切れ長の瞳が合った。

「ふーん、おまえか」

冷たく残忍な光がその瞳に宿っている。

はなは小名田堵こなみぢうたどの娘として生まれたが、人の良い両親は、生活の苦しい農民に租税賦課を強要できず、納められない租税のかわりに、両親は受領すじうの息子へ側女そへめとして娘を差し出した。

「りようさま！ だめです。もつと優しく云ってあげてください！」

父とともに、側近に対する荒い言葉遣いと態度を見せるりようを怖れもしないはな。

贅沢な暮らしの中で気促きせまに育つたりようを、はなは度々戒めた。

最初の頃は睨みつけ、腹いせに乱暴な振舞いをしていたりようも、次第にはなのその生意気さが気に入り、わざと怒らせるようなこともあった。

「はな、出かけるぞ！ 町のはずれでおまえの好きな桜が満開らし

い！」

りょうは大きな声で云うと遠慮もなしに、はなが使っている部屋の戸を勢いよく開けた。

はなが嬉しそうに、

「はい！」

と頷くのを見て、りょうの瞳にも嬉々とした表情が宿る。

出会って一年を越える。二人の心は急速に近づいていった。

「うわあ、きれい！」

はなのはしゃく声がりょうに喜びをもたらす。

大きな桜の木から、風に揺られて花びらが降ってくる。その花びらが、はなの頭に留まった。

それを払いのけてやると、りょうははなに顔を近づけた。

「りょうさま？」

「今日は付き人なしだ。いいだろ？」

クスクスと笑う、はなの無邪気さが愛おしい。その躰はもう決して無邪気ではないのに。

くちびるが触れる刹那。

ほかに人影もなかったはずのこの時に、だれかが土を急いで踏みしめてくる音が耳に入る。

触れそうになっていた顔を離して目についたのは、驚くほど近くに駆け寄ってきていた、りょうより年若い少年の姿。

なにかを決意した必死な様とその手に鈍く光る刃物が同時にはなの視界に入る。

その少年の目は真っ直ぐにりょうへと向かっていた。

「父上の仇だ！」

はなの躰が咄嗟はじつに動く。
りょうと少年の間に入ったとたん、腹部が熱く貫かれた。
少年は刃物を引き抜こうとしたが、はなはそれを許さなかった。
りょうさまを傷つけないで。
少年が腰を抜かしてへたり込む。

「はな?!」

りょうが背後からはなを抱きかかえ、共に崩れ落ちる。

はな、はな、はな つ!

りょうの大きな声が空気を揺るがす。

「……………りょうさま……………いつの日か……………また会いたい……………会
えますか……………?」

はなの瞳に、桜の中で揺れているりょうが映る。

桜の花に……………貴方を……………希ねがふ。

はな つ。

「おまえたちが悪いんだ。おまえたちに租税を迫られて父上は自害
した。おまえの父上が悪い。おまえもだ……………」
少年が放心したように呟き続ける。

だからといって、なぜはなが。

苦しい。

眠れない。

もつ会えないということが身を刻む。

あの日からはじめての満月の夜、誘われるように【魔】に身を委ゆたねた。

はなを探せども探せども、この時に姿は現れず。

「おまえは、はなじゃない」

そう云っては切り裂き、目の前に女が倒れた。

「おまえが、はなを殺した」

そう云っては切り裂き、目の前に少年が倒れた。

この手で幾人の命を奪い、歳月を重ねてきたのか。

はなを求める心だけが息づき、哀しみを失いかけた頃、一人の若い術師がりょうのまえに現れた。

「そなたが魔と契約した年 十八の年を迎える春、【魔】の憶えが蘇るであろう。その時から最初の満月を迎えるまでにはなを探すがよい。探し当てるまで、そなたの魂が静まることはない。数え切れぬほどの命を無にした、そなたへの罰。そして温情でもあろう。よいな」

術師の横にぼんやりとした影が佇んでいる。

はな……………？

その気が緩んだ瞬間を狙ったかのように、りょうへの術が施された。

はなっ!!!

自分と海野の間に入った花南の躰を背後から抱き寄せ、領はそのままぐるりと躰を回し、海野に背を向けた。

おれが欲していたのは、はなの面輪おもてじゃない。はなの心だ。

すべての風景が消え、ただ空間に、散り急ぐ桜の花びらが舞い続ける。

痛みが背中を覆う。

はな……………あの時に云うことのなかった言の葉……………。
それでも会いたいと希ねがってくれたはなは、花南としてここに在ある。

「領?!」

「はな、愛しているから……………」

花南の耳もとにそう告げた瞬間に、重石が取れたように領の心が軽くなる。

領の腕に包まれたまま、花南は躰の向きを変え、その瞳に見入った。

「りようさま……………ありがとう」

領が強く目を閉じる。

「……………やっと違たがえなかった……………」

「でも、あたしたちはまた……………」

「はな……………また会えるだろうか……………この次は最初から……………は

なの心を違えることなく……………」

領の躰が力尽きたように崩れる。

それを支えていた花南も一緒に座り込んだ。

「もう、この命も最後でいいから、領といま、ずっと一緒にいたいよ」

「そうだな……………もう、この時代だけでいい……………。いまのこの瞬間の至福を抱いて……………このまま共に……………おまえを連れて行きたい」

途切れ途切れに呟く領の声がかぼそくなっていく。

「おいていかないで……………」

あの時、【りょう】はこんな想いを抱いて……………狂った。

「もう、よかるう」

見知らぬ男の声が降りかかる。

花南と、彼女の肩に顔を埋めていた領が、声の主を振り仰ぐ。

花希には似つかわしくない、落ち着いた男の声。

花希は右手を上げて、自分の顔を撫で下ろした。

そこに現れたのは、いまの時代にはそぐわない着物を纏った面長の若い青年だった。

「おまえは……………おれに罰を与えた……………術師……………」

「そう、そしてそなたが求める、はなにも罰を」

「なぜ……………はなに?! はなは……………なにも悪いことはしていない!」

「はなが自分で望んだこと。そなたへの罰を少しでも易くしようと、はなが自ら己を頼ってきた。そして共に、己もそなたたちに付き添うという罰を自らに与えた。罰は罰をもって効力を発揮される」

「術師さま……………あなたはもしかして……………」

哀しみをその瞳に宿した術師は、悟ったはなに目をやり、頷いた。

「はな、そなたにはすまないことをした。あれは闘おうとしなかった父上の弱さであったのに。己の容易い思い込みがすべての災いを招いた。りょうの魔を防ぐことも敵わず、術師として一人前になるまでの十年。本来、罰せられるは己であったのだ。申し訳ないと思っっている。最後までかまわぬと云う、はなの希いを叶え、今生においてはそのあなたの近くにはなを置いた。そなたたちが廻り合えたということは、千年の時を経て、無下に散った魂たちが治まったということであろう。ようやく己も永眠れる」

術師は身を屈め、領の背に手を当てた。

「ここまで変わらず互いを追い求めたそなたたちの ときに、はなの苦難には敬を顕し、己の寿命を授けよう」

領の背からナイフが落ち、熱い痛みがなくなり、意識が鮮明になる。

「共に生きてゆくがよい」

その言葉を残し、安堵の笑みを口に宿した術師は桜が舞う幻想に満ちた風景を連れて消えた。

二人は校庭の片隅にある桜の木の下に座り込んでいた。

「花南」

「領」

揃えて紡いだその名は、この時代で共に生きていく証。

桜の花に 貴方を、きみを、希ふ

桜花希の存在と領の荒んだ行動は人の記憶から消え、海野は何事もなかったように取り仕切り役に戻っていた。

「花南、おれは医者を目指す」

鮮やかな黄緑色の葉桜の下、罪を抱持した領が決心を伝えた。

「おれが奪った命のぶん、おれはこの時代で命を返す」

「うん。じゃ、あたしはナースを目指す」
くっ。

領が笑う。

「そう云うと思った。単純な奴」

花南は無邪気に笑い、

穏やかな、そして花南への抑えきれない激愛を終始、湛えた領の瞳を見上げる。

領は抗議されるまえに、そのくちびるに素早くキスをした。

千年の記憶は、時に苦しく、時に哀しく、そしていま、ただ愛おしく。

もう繰り返されることのない命を共に全うするまで、そして、永遠に魂が離れることのないように
我、きみの心を、ただ希ふ

終

(後書き)

平安時代後期の用語

牛車ぎしや・・・貴人が利用した牛の乗り物

小名田堵しよつみうたと・・・田地経営をおこなった有力百姓層（大名田堵

より規模が小さい）

受領すりよう・・・現地に赴任して行政責任を負う筆頭者

ブログ仲間からのお題『仮面』よりできた作品。晶がはじめて挑戦したファンタジーです。ちなみに花南の名前は「はな」とも読めるようにちょっと拘ってみました。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1031e/>

転生の調べ ~ 惑いの面輪 ~

2009年3月24日09時10分発行